

| | | | |
|---------|-----------|---|---------------|
| 氏名 | 岡本 文音 | | |
| ヨミガナ | オカモト アヤネ | | |
| 学位の種類 | 博士（音楽） | | |
| 学位記番号 | 博音第374号 | | |
| 学位授与年月日 | 令和5年3月27日 | | |
| 学位論文等題目 | （論文） | 日本のコントラバスの歴史 ～明治期から終戦後における日本人コントラバス奏者の実態～ | |
| | （演奏） | F. ツェルニー：コントラバス協奏曲第4番 他 | |
| 論文等審査委員 | | | |
| （主査） | 東京藝術大学 | 教授 | （音楽研究科） 吉田 秀 |
| （副査） | 東京藝術大学 | 教授 | （音楽研究科） 池松 宏 |
| （副査） | 東京藝術大学 | 教授 | （音楽研究科） 山下 薫子 |
| （副査） | 東京藝術大学 | 名誉教授 | 永島 義男 |

（論文内容の要旨）

本研究の目的は日本におけるコントラバス演奏の受容と発展の歴史について、明治期から終戦後における日本人コントラバス奏者の実態の調査によって明らかにすることである。

日本におけるコントラバスの歴史は、1880年にはじめてコントラバスが注文され翌年に到着したことははじまる。そして、およそ140年にもわたる長い年月をかけ、今や受容という段階を越え世界に誇る日本の演奏家が何人もいる。しかしこのような長い歴史を持ちながら、日本のコントラバスの歴史はごく一部の関係者が知るのみであり、さらにその全体像に至っては全く知られていないのが実情である。

本稿では全体を、明治期、大正期から終戦（1945年）までの時期、そして終戦後の時期として終戦から1960年代までの時期を区切り、これらの大きく3つの時期に大別し考察を行った。それらの時期について、現在認識されている断片的な情報を手がかりに、関係者への聞き取り調査を行ったほか、音楽雑誌、新聞記事、教則本、プログラムといった様々な史料の分析を通じて明治期から1960年代までの期間における日本人コントラバス奏者の実態を明らかにすることを試みた。

第一章では明治期について取り上げ、日本の洋楽導入期におけるコントラバス演奏の動向を探った。結果として、1881年にはじめてコントラバスが日本に持ち込まれ、手探りでの習得がはじまると、コントラバスの正統な奏法を知る奏者や教師のいない中、コントラバスを演奏する者たちは教則本などを頼りに、独学もしくは我流でコントラバスを習得し演奏していたことが明らかとなった。また、この時期の音楽家の弾く楽器は専門化されておらず、特にコントラバスを弾く者は他にも演奏楽器があることがほとんどであり、人材や楽器が不足する中、時代とともに高まるコントラバスの演奏需要の増加に、演奏家はひたむきな努力でこたえていたことが分かった。

第二章では大正期から終戦までの時期を取り上げ、日本のコントラバスの歴史の転換点となった長汐壽治の留学前後におけるコントラバス演奏の実態を明らかにすることを試みた。まず長汐の留学前、大正期において大衆の間で洋楽文化の人気の高まり、音楽活動が活発化し職業としてのコントラバス奏者が現れたことが分かった。また、音楽活動の活発化から交響楽振興の機運が高まり、音楽家たちの芸術的欲求が高まる中で、「従来こうだろう位の想像で弾いていた奏法」から脱却すべく、新交響楽団のメンバー長汐壽治が、コントラバスの正統な奏法を学ぶためにはじめての欧州留学を果たし、同地での長汐の学びが以降の日本におけるコントラバス演奏の礎を築いたことが分かった。

第三章では日本のコントラバス演奏が終戦後どのように発展していったのかを、終戦後から1960年代までの期間を探った。長汐壽治は終戦後に北海道へと移住し、移住後に同地で長汐に学んだ生徒たちが長汐の教育を広めたことにより、以降日本のコントラバス界は、礎としてプラハ派の流れを汲みながら、独

自の発展を遂げていくことになる。以上の結果から長汐壽治のプラハ留学が日本のコントラバスの歴史の大きな転換点となったことが分かった。また、1957年に江口朝彦と赤星旻によってコントラバス・リサイタルが開催されると、以降続々とリサイタルが開催されるなど、日本人コントラバス奏者の間で独奏への憧れが高まっていく様子が窺えた。また、ドイツやウィーンを中心とした海外留学が活発になり、欧州のオーケストラで働くものや国際コンクールで入賞する日本人コントラバス奏者も現れるなど、日本人コントラバス奏者たちは国内にとどまらず国際的にも活躍していき、日本におけるコントラバス演奏は受容という段階を越え、発展していったことが分かった。

明治期から1960年代における日本人コントラバス奏者の実態の調査により日本のコントラバスの歴史の全体像が明らかになったことで、日本においてコントラバスは独学もしくは我流で受容が開始され、長汐壽治の留学によってプラハ派の影響を受けたことによってさらに洗練されていき、終戦後の欧州留学活発化によってドイツやウィーンといった地域の影響も受けてきたことが分かった。

日本のコントラバスの歴史に関する史料は昭和初期以降からは比較の見つかりやすかったものの、それ以前の時期については史料が乏しく、明治期から昭和初期の間までに見られる歴史の断絶が浮き彫りになった。一方で、これまで断片的にしか認識されていなかった日本のコントラバスの歴史を整理し体系的にまとめたことで、コントラバス奏者である筆者自身が、大きな歴史の中の一部であるという実感をはじめ持つことができた。日本のコントラバスの歴史の全体像がまとめられたものの、明治期から存在していた独学もしくは我流で演奏活動を行っていたコントラバス奏者たちはその後どうなったのか、また長汐壽治の具体的な奏法や教育内容はどのようなものだったのか、これまで埋もれていた様々な歴史的事実が明らかになったからこそ、より詳細な歴史的事実の解明という今後の課題が明らかとなった。今後とも調査を進めていくとともに、本研究が日本のコントラバスの歴史に興味持つ様々な方々への、今後の研究の一助となれば幸いである。

(総合審査結果の要旨)

明治期に初めて日本でコントラバスが演奏されるようになった頃から、終戦後海外へ留学しその技術を持ち帰った、本学の歴代の教授陣について調べられた論文である。

総じて良く調べられたものであり、特に明治期についての記録は貴重であると思われる。終戦後についても重要な人物との接点を持つコントラバス奏者が既に高齢な為、聞き取り調査のタイミングとしては良かったと思われる。

但し歴史を調べあげた記録にとどまっている面も否めず、論文としての結論部に改善の余地がある。

学位審査演奏会では明治期に宮内庁の伶人としてコントラバスを演奏した蘭廣虎が作曲したものを友人の作曲家に編曲を依頼して演奏。後半は歴代の教授陣の留学先であるチェコの作曲家であるF. ツェルニー、F. ヘルトゥルの曲を演奏。音量のバランスには少々問題があったが、意欲的で愛情溢れる演奏で好感が持てた。